

主日礼拝8月21日（日）

題 「祝福を受け継ぐために」

テキスト：ペトロの手紙Ⅰ 3章8～22節

皆さん、おはようございます。

わたしは夏になると思い出すことがあります。それは夜になると家の前で手に持って花火をしたことです。特に線香花火が好きでした。線香花火はだいたい最後に行っていました。何だか寂しいような、でも線香花火の暗くなって行く最後にちょろちょろ光る炎に子どもなりに終わりの近さとまた美しさを感じていました。今年はまだまだ暑い夏が続くのでしょうか。気をつけて過ごしたいものです。

さて、今日の聖書の個所では、ペトロは、キリスト者が＜正しいことのために苦しむ＞ことについて記しています。

8節には、「終わりに、」という出だしで一つの区切りのように語っています。「皆心を一つに、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい。」と。「同情し合い」とは、苦しみを分かち合いということです。

「互いにおもいやりを持って、神さまの前に自分自身低いように、人の前でも自らを低くくしなさい。」と受けとめます。人間の上下関係ではなく、みな神さまの前では低いのですから、人間関係でも生かせるのです。決して卑屈になったり、演技のような態度ではないのです。互いに大切にするという思いからの姿勢です。

「9:悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。

「かえって祝福を祈りなさい。」 関係が悪くなると、そんなことはできないと思う気持ちもすぐに起こります。

でもこれは、できるかできないではないのです。神さまに任せてみるのです。憎しみは、一度棚にあげてみるのです。

ペトロは、現在のトルコ地方に離散し、離れ離れになっているキリスト者たちに、あなたがたは、「祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです。」と励ましています。わたしたちも、すでに愛なる神さまによって、受け入れられている、「良し」とされているのですから、人や何かを畏れ怯えたりする必要はないのです。

人は誰でもイエスさまの十字架の愛ゆえに、現実的には苦しいことがあっても、与えられた平安に心を委ねて神さまの祝福の中を生きて行って良いのです。それが、祝福を受け継ぐ者の生き方だと思います。ペトロの勧めは、わたしたちの現実生活の中で、悪に悪を持って、侮辱に侮辱を持って接しないという忠

告でもあります。

誰も人間関係の中で、理不尽な目に合うと、腹が立つこともあるのです。

でも、そこで一度、神に委ねてみて生きるのです。「あの人も神さまの愛しておられる人なのだ。」と思って祈ることも有意義なことだと思わされます。

ペトロは、旧約聖書詩編 3 4 編 1 3 節～1 7 節 (p 865) の古代の信仰者の言葉を引用して伝えてくれています。

10:「命を愛し、／幸せな日々を過ごしたい人は、／舌を制して、悪を言わず、／唇を閉じて、偽りを語らず、

11:悪から遠ざかり、善を行い、／平和を願って、これを追い求めよ。

12:主の目は正しい者に注がれ、／主の耳は彼らの祈りに傾けられる。

主の顔は悪事を働く者に対して向けられる。」

ここの言葉は、紙に書いて、時々読み返したいと思いました。

ペトロの教えは続きます。

「13:もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。」 時にはそのようなことも、あるかもしれないのですが、たとえば、そのような状況になったとしても、怯える必要はないのだと思わされました。神さまが守り、善きに導いてくださると思うからです。

「14:しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません。」この説は、イザヤ書 8 章 1 2 節、1 3 節からの引用です。「彼らの恐れるものを、恐れてはならない。」とあり、これは、「彼らの恐れを恐れるな。」という意味だとある聖書学者は教えてくれます。

「人間は人々を恐れ、恐ろしさを恐れるのです。」、心を乱し、狼狽（うろた）えてしまいやすいのです。

この力から解放されるには、どうしたら良いのでしょうか？この「恐れと心の乱れ」が、誰もが悩まされ、わたしたちが、毎日生きるために、事あるごとに自分の心の邪魔ものになっているのです。「15:心の中でキリストを主とあがめなさい。」とあります。イエス・キリストをあがめる。まっすぐにイエスに心の目を向けるのです。それを第一とするのです。主イエスより以上に、恐れや、心の乱れを上置いてはならないのです。それは偶像礼拝になるのです。生きる希望をイエスさまに置くのです。その時、きっとそれぞれに相応しい道が備えられるのです。

むしろ、

「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」主にある希望。復活の希望、永遠の命の希望があるのです。わたしたちには希望の光があるのです。すでに与えられているのです。希望はある。信じる者にとっては主イエスが希望なのです。

人と人との間では、

「16:それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい。」

「17:神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。」のです。神さまがすべてをご存知だからです。

その時、苦難の中にある信仰者を支えてくれるものは、神の子イエスの十字架に至る苦しみです。イエスさまの受けた苦しみが、わたしたちの何よりの慰めとなるのです。神さまは忍耐し信じる者たちを見捨てることはなされないのです。

最後に、ペトロはキリストの苦難と勝利について語っています。

「18:キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。」

「正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。」こんなことが起こったのです。イエスの十字架の苦しみ。恵みです。「キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。」よみがえり、奪われることのない復活の命に生きておられる方なのです。キリストがより頼む者たちを神のもとへ導くと言われます。この「神のもとへ導く」ということばは、「神へと連れて行く」と訳す聖書学者もいます。わたしは良い訳だと思います。イエスさまは、弱い小さな私を、私たちを神さまのもとへ連れて行ってくださる方なのです。イエスに心の手をつなぐのです。それが平安をもたらしてくれるのです。

ここでペトロは旧約聖書の古事、創世記に記されているノアの洪水物語を引用して、洗礼を受けた者たちの新しい生き方を語っています。

19:そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。

20:この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。

神に従うノアはやがて大洪水がくること、その時のために箱舟を作るようにとの神の声を聞き、その命令に従い、多くの人たちがあざ笑う中、ただ一人、黙々と箱舟を作りました。

ノアをばかにし嘲笑った人たちや、それに追従した多くの人たちは滅びました。ただ「この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通して救われました。」とあります。このようなことは、今日でも起こり得ることのように思えます。

これは、いたずらに緊張してビクビクするのではなく、危機に備えて心備えをすることです。いつの時代も、どの場においても大切なことではないでしょうか。ペトロは、この神の起こされたノアの大洪水の破滅と救いの出来事を主イエスの名による洗礼にたとえています。

21:この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。

洗礼を受けるとは、イエス・キリストの復活によってわたしたちの心と魂を救ってくれるのです。洗礼を受けた者の心には神さまの慰めである聖霊が宿り、平安が宿っているのです。たとえ忘れたとしても、神さまに祈る時に思い出させてもらえます。「主よ！すぐに恐れと不安に支配されやすい私の心を導いてください。」と祈るのです。すると、自分でも気づかないうちに、心に平安が注がれているでしょう。ひたむきで真実な祈りは、井戸から水を汲む釣瓶「つるべ」(縄や竿の先につけて井戸の水を汲みあげる桶) のようです。洗礼を受けているということは、この世の力では得ることのできないとても大きな大きな恵みだと思わされます。

また、洗礼は、ノアの時代の滅びではなく、「神に正しい良心を願い求めることです。」といわれます。これは、信じる者一人一人に新しい生き方をもたらすということだと思うのです。生きて行くのです。善を行なうために生き延びるです。

最後にペトロは、十字架に至るまで苦しみの道をたどられ、十字架にご自身の命まで捧げてくださったイエスを褒め称えています。

「22:キリストは、天に上って神の右におられます。天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです。」と主イエス・キリストを褒め称え、賛美しているのです。わたしたちも心から主イエス・キリストの光に照らされて主を褒め称え、線香花火のように小さくても闇に輝く希望に燃える群れとして歩みたいと願います。

主の平安を祈ります。